

「若年層の就労に関する意識調査」の結果概要

フリーターを含むさまざまな就労形態の若者を対象に、
就労観や将来の生活設計に関する考え方を幅広く質問。
就労形態による考え方の違いが明らかに。

株式会社明治安田生活福祉研究所(社長 石原 義男)は、多様化する若年層の就労観や将来の生活設計に関する考え方を探ることを目的に、「若年層の就労に関する意識調査」を実施いたしました。以下、その概要をご報告いたします。

本調査の特徴

「正規就労者」「派遣・契約社員」「パート・アルバイト」「無職・求職中」の4つ就労形態の若年層から、それぞれ相応の標本を得ることができました。あわせて、学生からも回答を得ています。本調査におけるフリーターは、就労形態による定義ではなく、「派遣・契約社員、パート・アルバイト、無職・求職中の単身者のうち、自らをフリーターと認識する人」としています。仕事に関する考え方を中心に、就職活動、親との関係、将来の生活設計など多岐にわたって質問を行いました。加えて、自分自身の性格・タイプや能力などに関する自己評価についても尋ねています。これにより、就労形態による考え方の違いをさまざまな角度から分析しています。

本資料は、日本銀行金融記者クラブ、文部科学記者会、厚生労働記者会に配布しております。

ご照会先	(株)明治安田生活福祉研究所 生活設計研究部 奥野、柴田、正札、森	電話：03(3283)9297 FAX：03(3201)7837 Eメール：rbj@myilw.co.jp
------	---	--

主な内容

(1) 就労形態別にみた就労観等の調査結果

◆ 「社交性」「気分転換」「リーダーシップ」は就労形態により大きな差	P . 6
◆ 就労形態が不安定なほど消極的な自己評価	P . 6
◆ 「収入や出世のためなら仕事が見つくても頑張れる」「一人よりチームで仕事」は就労形態により大きな差	P . 8
◆ 「転職することに抵抗はない」 派遣・契約社員は6割強、ほかも5割前後	P . 8
◆ 「ほかの人とうまくやっていく能力」「健康・体力」は就労形態により大きな差	P . 11
◆ 暮らし向きの自己評価は、正規就労者と非正規就労者で大きな差	P . 13
◆ 働くことを意識する時期が早いほど、現在の就労形態は安定	P . 14
◆ 進学時点の就労意識が明確なほど、現在の就労形態は安定	P . 14
◆ 単身者の今後10年間の生活の楽しみ 「恋愛」「結婚」は女高・男低。無職・求職中の男性の3人に1人が「楽しみなし」	P . 16

(2) フリーターに関する考え方等の調査結果

◆ 父親とのコミュニケーションが「良い」は、正規就労者6割、フリーター4割	P . 18
◆ フリーターの半数が父親の生き方・働き方を否定 4人に1人は強く否定	P . 21
◆ 学生はフリーターに厳しい眼 大学生の約半数が「いつまでも続けるのはよくない」	P . 23
◆ フリーター増加の原因を学生・正規就労者は「本人の問題」と考える傾向、フリーターは「外部環境」と考える傾向	P . 23
◆ フリーターになった理由のトップは「自分に合う仕事をみつけるため」。男性に多い「夢の実現」、女性に多い「自分の病気・ケガ」	P . 25
◆ フリーターは「卒業・中退直後からパート・アルバイト」が4割で最多	P . 27
◆ フリーターの30歳代後半層は「最初は正規就労」が6割弱	P . 27
◆ “夢追いフリーター”の夢の職業は「芸能・芸術関係」が3分の1を超えトップ	P . 29
◆ 25~34歳の男性フリーター、4人に1人は「結婚するつもりはない」	P . 31
◆ フリーターから正規就労者になった人の半数以上はフリーター生活1年以内	P . 33

調査の概要

(1) 調査期間

- ・プレ調査 : 2006年3月3日～3月10日
- ・本調査 : 2006年3月23日～3月27日

(2) 調査媒体 : 「gooリサーチ」(NTTレゾナント株式会社提供)によるWEBアンケート調査

(3) 調査方法

ア.さまざまな階層の標本を、効率的に一定数以上確保するため、以下の手順により実施

プレ調査

- ・gooリサーチ登録モニターに対して、「性別」「年齢」「就労形態」「配偶者有無」等の基本属性に関する質問票を送信

本調査

- ・プレ調査に対して回答があった人のうち、一定の属性条件を充足した人に対して、本調査の質問票を送信
- ・回答数が、階層(例えば「女性、20～24歳、派遣・契約社員」など)ごとに予定した標本数に達した段階で、回収を打ち切り
- ・総回答数は3,068人

イ.細分化した階層ごとに十分な標本数を確保することを優先したため、標本の構成比は実社会の構成比とは異なる。

(4) 分析対象者

	就労観等に関する質問一般	フリーター自身に対する質問
本報告書の 項目番号	1～9、13、14	10、11、12
分析対象者	全国の17～29歳の男女 ・正規就労者 ・派遣・契約社員 ・パート・アルバイト ・無職・求職中 ・学生	全国の20～39歳の男女 ・下記就労形態のうち、「自分はフリーターだと思う」と回答した単身者 ・派遣・契約社員 ・パート・アルバイト ・無職・求職中
サンプル数	2,223人	669人

(注) 無職・求職中には家事手伝い、専業主婦を含まない。また学生には浪人中を含む(以下同じ)

(5) 「就労観等に関する質問一般」についての分析対象者の属性

ア.性別

男性	女性
1,005人(45.2%)	1,218人(54.8%)

イ．年齢 (上段は実数<人>、下段は占率<%>)

	17～19歳	20～24歳	25～29歳
男性	121	356	528
	12.0	35.4	52.5
女性	134	427	657
	11.0	35.1	53.9
計	255	783	1,185
	11.5	35.2	53.3

ウ．就労形態 (上段は実数<人>、下段は占率<%>)

	正規就労者	派遣社員 契約社員	パート アルバイト	無職 求職中	学 生
男性	347	56	154	134	314
	34.5	5.6	15.3	13.3	31.2
女性	351	165	213	202	287
	28.8	13.5	17.5	16.6	23.6
計	698	221	367	336	601
	31.4	9.9	16.5	15.1	27.0

(6)「フリーター自身に対する質問」についての分析対象者の属性

ア．性別

男 性	女 性
349人(52.2%)	320人(47.8%)

イ．年齢 (上段は実数<人>、下段は占率<%>)

	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳
男性	75	108	96	70
	21.5	30.9	27.5	20.1
女性	96	104	70	50
	30.0	32.5	21.9	15.6
計	171	212	166	120
	25.6	31.7	24.8	17.9

ウ．就労形態 (上段は実数<人>、下段は占率<%>)

	派遣社員 契約社員	パート アルバイト	無職 求職中
男性	52	222	75
	14.9	63.6	21.5
女性	53	157	110
	16.6	49.1	34.4
計	105	379	185
	15.7	56.7	27.7

<参考> 就労形態別のフリーター割合 (%)

	派遣社員 契約社員	パート アルバイト	無職 求職中
「自分はフリーターだと思ふ」と回答した割合	29.2	74.8	30.1

目 次

【就労形態別にみた就労観等の調査結果】

- 1．就労形態別にみた性格・タイプ p. 6
- 2．就労形態別にみた仕事に対する意識 p. 8
- 3．就労形態別にみた自信度 p.11
- 4．就労形態別にみた暮らし向き水準の意識 p.13
- 5．就労形態別にみた過去の就労意識・就職活動 p.14
- 6．就労形態別にみた単身者の今後 10 年間の生活の楽しみ p.16

【フリーターに関する考え方等の調査結果】

- 7．親とのコミュニケーション p.18
- 8．親のうしろ姿 p.21
- 9．フリーターに対する若年層の評価 p.23
- 10．フリーターになった理由 p.25
- 11．フリーターの卒業・中退直後の就労形態 p.27
- 12．“夢追いフリーター”の姿 p.29
- 13．フリーターの結婚観・子ども観 p.31
- 14．フリーターから正規就労者になった人 p.33

1. 就労形態別にみた性格・タイプ

「社交性」「気分転換」「リーダーシップ」は就労形態により大きな差
就労形態が不安定なほど消極的な自己評価

(1) 「社交性」「気分転換」「リーダーシップ」は就労形態により大きな差

就労上有利と考えられる10項目の性格・タイプについて尋ねた。現在の就労形態と性格・タイプとの関係を分析するために「性格D I_{II}」をみたのが図表1-1。

(注)ここで、「性格D I_{II}」は、性格に関する質問に対して「(やや)あてはまる」割合から「(あまり)あてはまらない」割合を引いた数値。この数値が大きいほど、質問に対する肯定度合いが高いことを示す。

「性格D I_{II}」からみた特徴は以下のとおり。

10項目中8項目で、「性格D I_{II}」は「正規就労者」がもっとも大きく、次いで「派遣・契約社員」「パート・アルバイト」「無職・求職中」の順となっている。

就労形態の違いによる「性格D I_{II}」の差が大きい項目は、「社交性がある」「気分転換がうまい」「リーダーシップがある」の3項目で、正規就労者と無職・求職中では50ポイント以上の開きがある。

就労形態が不安定なほど、今回質問した性格・タイプについて消極的な自己評価となっている。無職・求職中は6項目でマイナスとなった。

図表1-1 就労形態別にみた性格・タイプの「性格D I_{II}」 (%ポイント)

項目	正規 就労者	派遣・ 契約社員	パート・ アルバイト	無職・ 求職中
好奇心が旺盛である	64.3	57.5	46.9	47.6
感受性が強い	62.3	66.5	62.9	64.2
責任感が強い	61.6	55.7	49.3	35.7
計画を立てて行動する	44.4	48.0	32.7	28.3
楽観的である	34.8	33.5	12.0	10.1
社交性がある	26.4	14.9	0.8	36.9
気分転換がうまい	18.9	9.5	8.7	33.9
一人にいるよりも、家族や友人と一緒にいるのが好き	17.0	6.3	4.4	19.3
自分の考えをほか人に伝えるのが得意	3.7	6.8	20.2	33.3
リーダーシップがある	1.7	12.7	19.6	48.8

(2) 「感受性が強い」はどの就労形態でも7割

就労形態による「性格D I_{II}」の差が大きい3項目と、差が小さい「感受性が強い」の回答状況の分布をみたのが図表1-2。

差が大きい3項目については、就労形態が不安定なほど「あてはまる」「ややあてはまる」の両者とも割合が低くなっている。また、無職・求職中は3項目とも半数以上が「(あまり)あてはまらない」と回答。

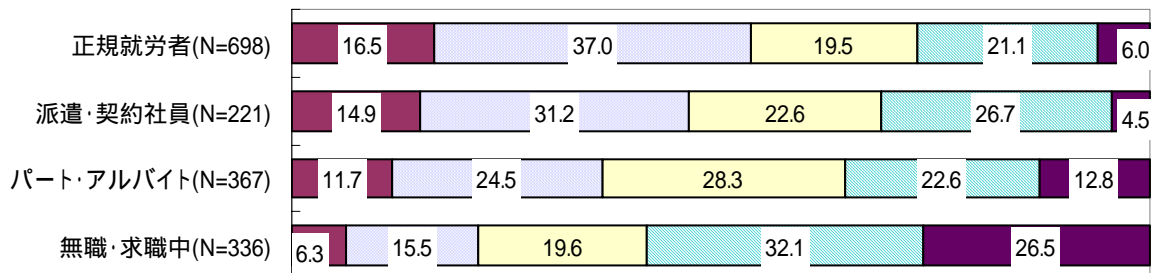
一方、「感受性が強い」は就労形態による差がみられず、「(やや)あてはまる」が各就労形態で7割前後となっている。

図表 1 - 2 就業形態別にみた性格・タイプ

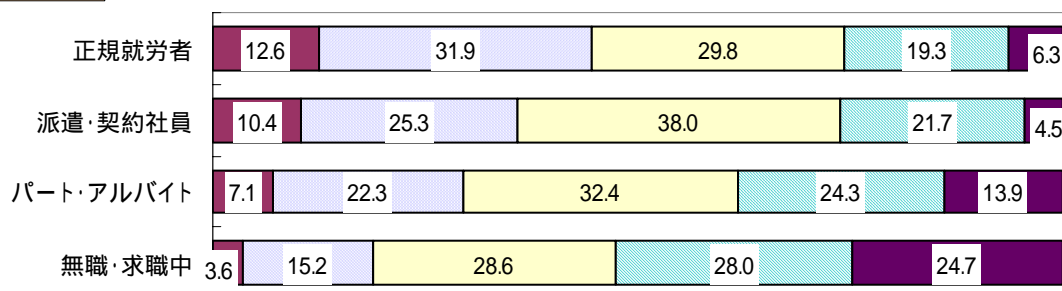
(%)

社交性がある

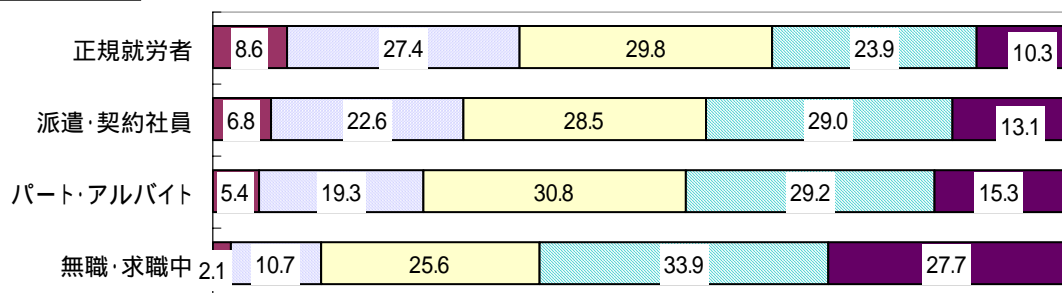
■ あてはまる □ ややあてはまる □ どちらともいえない □ あまりあてはまらない ■ あてはまらない



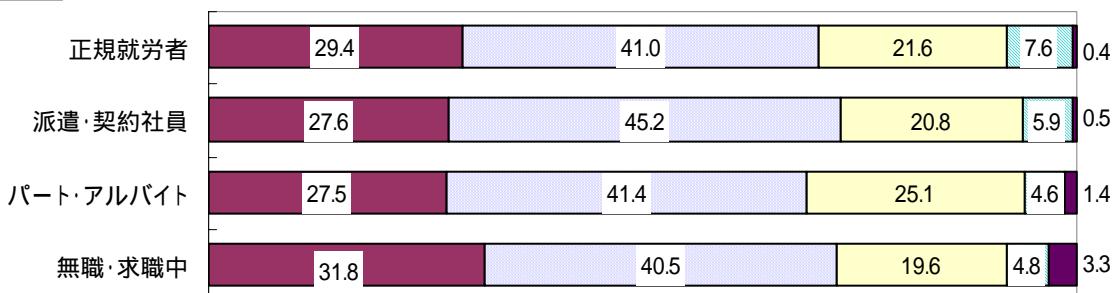
気分転換がうまい



リーダーシップがある



感受性が強い



2. 就労形態別にみた仕事に対する意識

「収入や出世のためなら仕事が続いても頑張れる」「一人よりチームで仕事」は就労形態により大きな差
「プライベートより仕事を優先」「一人よりチームで仕事」はどの就労形態でも肯定派の割合が少数
「転職することに抵抗はない」 派遣・契約社員は6割強、ほかも5割前後

(1) 「収入や出世のためなら仕事が続いても頑張れる」「一人よりチームで仕事をするのが向いている」は就労形態により大きな差

仕事とプライベートのいずれを優先するかや、一人で仕事をするのが好きかなど、仕事に対する意識 10 項目について尋ねた。現在の就労形態と仕事に対する意識との関係を分析するために「就労観DI₁₁」をみたのが図表 2-1。

(注) ここで、「就労観DI₁₁」は、就労観に関する質問に対して「(やや)あてはまる」割合から「(あまり)あてはまらない」割合を引いた数値。この数値が大きいほど、質問に対する肯定度合いが高いことを示す。

「就労観DI₁₁」からみた特徴は以下のとおり。

就労形態にかかわらず、若者全般の傾向として、「チームでの仕事に向いていない」、あるいは「仕事よりプライベートを優先する」と自己評価する若者のほうが多くなっている。

就労形態の違いによる「就労観DI₁₁」の差が大きい項目は、「収入や出世のためなら仕事が続いても頑張れる」「一人よりチームで仕事をするのが向いている」の2項目で、正規就労者と無職・求職中で約 40 ポイントの開きがある。後者については上述のとおりだが、前者についても、正規就労者を除いて、いずれも「(あまり)あてはまらない」のほうが多いこと、すなわち、収入等のためでもきつい仕事は敬遠する若者が多いことが注目される。

「転職することに抵抗はない」は、元々職場や派遣先の変更が前提となっている派遣・契約社員が 50 ポイントを超え、ほかの就労形態はいずれも 30 ポイント強で横一線。

無職・求職中のみ相違した値を示し、ほかの就労形態間ではほぼ同じなのは、「稼がなくても生活できれば働きたくない」(無職・求職中 16 ポイント、ほかはほぼ 0 ポイント)、「年功主義より成果主義がよいと思う」(無職・求職中 16 ポイント、ほかは 30 ポイント)。

図表 2 - 1 就労形態別にみた仕事に対する意識の “就労観 D I_{ii}” (%ポイント)

項目	正規 就労者	派遣・ 契約社員	パート・ アルバイト	無職・ 求職中
学校を卒業したら経済的に自立すべき	74.4	71.0	49.9	43.8
働くことは社会の一員として当然である	63.6	59.3	49.3	38.4
年功主義よりも成果主義がよいと思う	32.5	30.3	31.1	15.5
転職することに抵抗はない	31.5	51.6	33.2	32.1
定例的な仕事よりも新しい仕事に挑戦したい	27.9	27.1	12.5	0.9
収入や出世のためなら仕事が見つくても頑張れる	7.9	11.8	9.8	32.4
稼がなくても生活できれば働きたくない	1.1	0.5	1.9	15.8
一人よりチームで仕事をするのが向いている	5.7	25.3	31.9	44.0
収入が少なくても社会に貢献できる仕事をしたい	21.2	25.3	16.9	15.8
プライベートより仕事を優先する	24.6	38.0	28.6	48.8

(2) 「転職することに抵抗はない」 派遣・契約社員は 6 割強、ほかも 5 割前後

“就労観 D I_{ii}” の差が大きい 2 項目と派遣・契約社員で特徴があった「転職することに抵抗はない」の回答状況の分布をみたのが図表 2 - 2。

「収入や出世のためなら仕事が見つくても頑張れる」については、その “就労観 D I_{ii}” が唯一プラスの正規就労者においても「(やや) あてはまる」が 4 割。「派遣・契約社員」「パート・アルバイト」「無職・求職中」の順に低下し、最低の「無職・求職中」では 2 割を切る。現在の就労状況を思い浮かべて回答しているものと思われる。

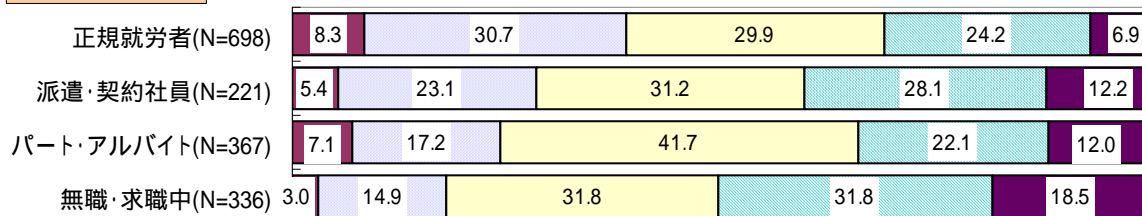
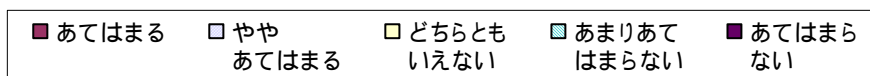
「一人よりチームで仕事をするのが向いている」については、さらに「(やや) あてはまる」が少なく、また、就労形態が不安定になるほど少なくなり、無職・求職中では 1 割を切る。

「転職することに抵抗はない」について「(やや) あてはまる」と答えた割合は、派遣・契約社員が 6 割強ともっとも高いものの、正規就労者およびパート・アルバイトも 5 割を超えており、無職・求職中でも半数に近い。なお、就業者に転職経験の有無を尋ねたところ、「転職経験あり」と答えた割合は、当然のことながら、派遣・契約社員 (84%) が、パート・アルバイト (54%) や正規就労者 (38%) を大きく上回る (図表略)。

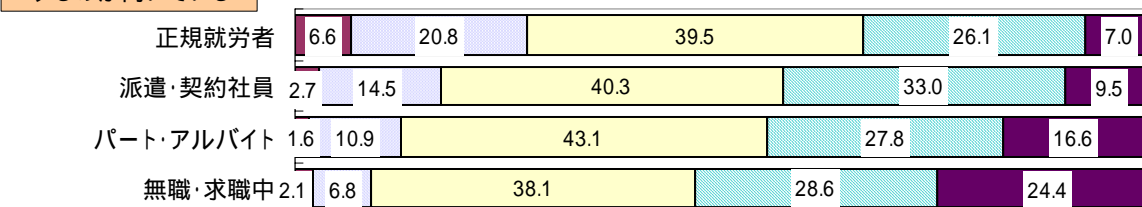
図表 2 - 2 就業形態別にみた仕事に対する意識

(%)

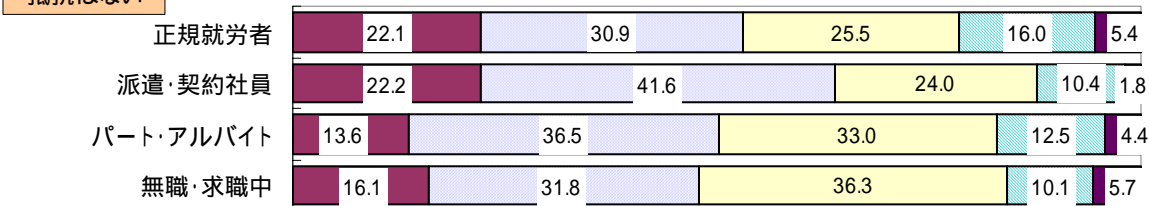
収入や出世のため
なら仕事がつく
ても頑張れる



一人よりチームで仕事を
するのが向いている



転職することに
抵抗はない



3. 就労形態別にみた自信度

「ほかの人とうまくやっていく能力」「健康・体力」は就労形態により大きな差
 派遣・契約社員の「仕事の能力」自信度は正規就労者と同程度
 自信度が低い無職・求職中

「健康・体力」や「仕事の能力」等6項目について自信の有無を尋ねた。現在の就労形態と自信度の関係を“自信度DI_{ii}”で分析した。

(注)ここで、“自信度DI_{ii}”は、質問に対して「(やや)自信がある」割合から「(あまり)自信がない」割合を引いた数値。この数値が大きいほど、質問に対する自信度合いが高いことを示す。

(1) 「ほかの人とうまくやっていく能力」「健康・体力」は就労形態により大きな差

“自信度DI_{ii}”で、正規就労者と無職・求職中で50ポイント以上の開きがあるのは、「ほかの人とうまくやっていく能力」(60ポイント差)と「健康・体力」(51ポイント差)。若年層でも健康を害して、やむをえず無職・求職中となっている人がかなり存在していると推察される。

「仕事の能力」が3番目に大きく、45ポイントの差。

(2) 派遣・契約社員の「仕事の能力」自信度は正規就労者と同程度

派遣・契約社員の「仕事の能力」に対する“自信度DI_{ii}”は、正規就労者と同程度。「自信がある」でも、正規就労者のほうが5ポイント弱多い程度の違い。

「ほかの人とうまくやっていく能力」と「容姿」についても、派遣・契約社員と正規就業者間の“自信度DI_{ii}”の差は10ポイント未満と小さい。

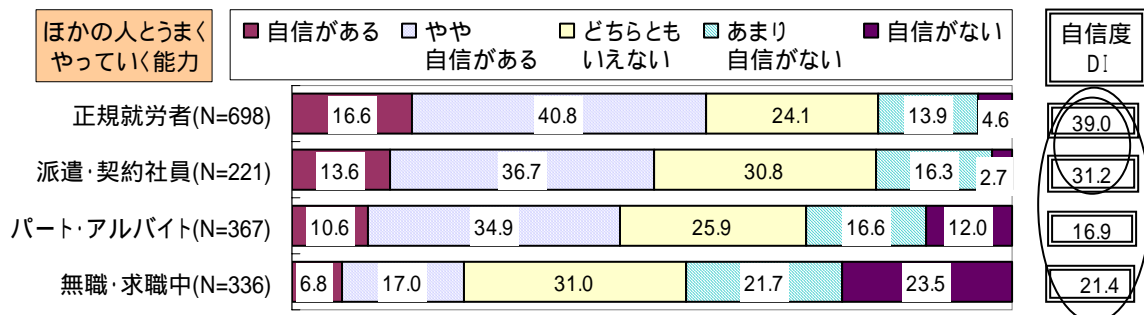
(3) 自信度が低い無職・求職中

「(あまり)自信がない」が「(やや)自信がある」を上回る項目は、正規就労者はない。派遣・契約社員とパート・アルバイトは「学歴」と「容姿」の2項目。

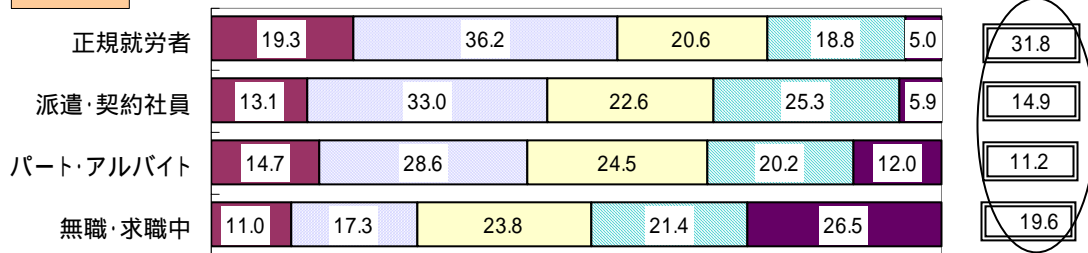
ところが無職・求職中は「学力・教養」を除いた5項目で該当し、ほかの就労形態と比べて自信度が低い。無職・求職中という現状が自信度を低めていると分析されるが、中には一部、反対に自信がないために無職・求職中となっている可能性も考えることができる。

図表3 就労形態別にみた自信度

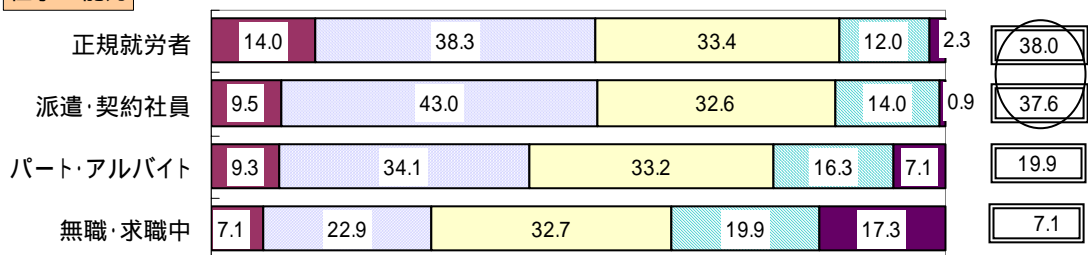
(%、%ポイント)



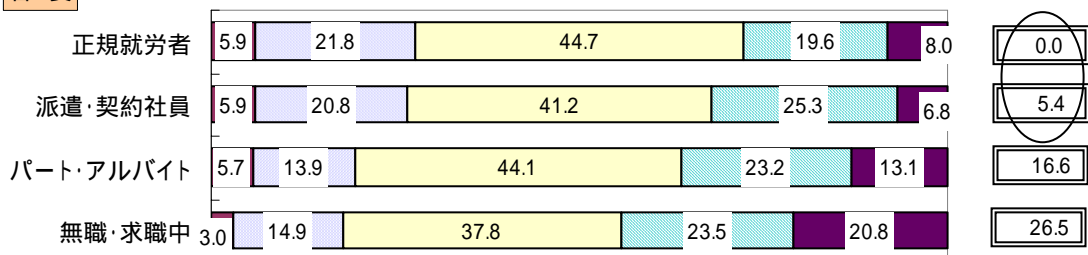
健康・体力



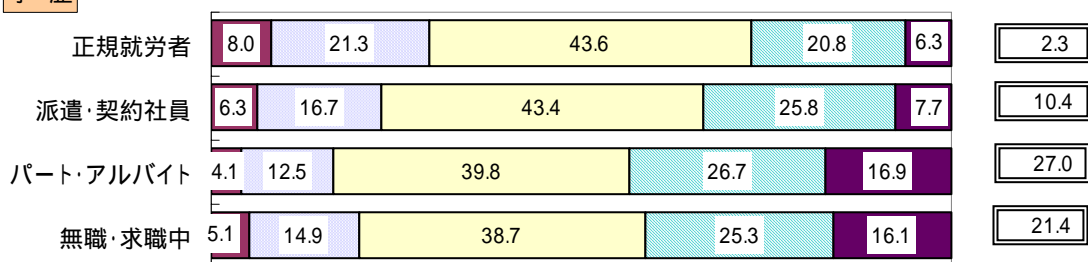
仕事の能力



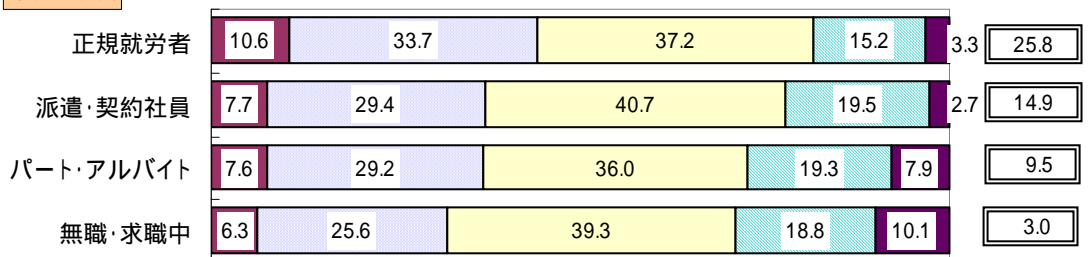
容姿



学歴



学力・教養



4. 就労形態別にみた暮らし向き水準の意識

暮らし向きの自己評価は、正規就労者と非正規就労者で大きな差
暮らし向きの自己評価は女高・男低

“現在あなた自身の暮らし向きは、同世代の人と比べてどの程度と思うか”を尋ねた。

『平均より高い』（「平均よりかなり高い」と「平均よりやや高い」）割合と、『平均より低い』（「平均よりやや低い」と「平均よりかなり低い」）割合を就労形態別に比較した。

(1) 正規就労者と非正規就労者で差が大きいのは、暮らし向きが『平均より低い』と思っている人の割合

正規就労者と非正規就労者の待遇や雇用安定度の差により、暮らし向きに関する自己評価がどの程度異なるのかを男女別にみた（図表4）

暮らし向きが『平均より低い』と答えた人の割合は、正規就労者がもっとも少なく、男女とも派遣・契約社員、パート・アルバイト、無職・求職中と増加していく。非正規就労者では『平均より低い』割合が正規就労者を大きく上回る。

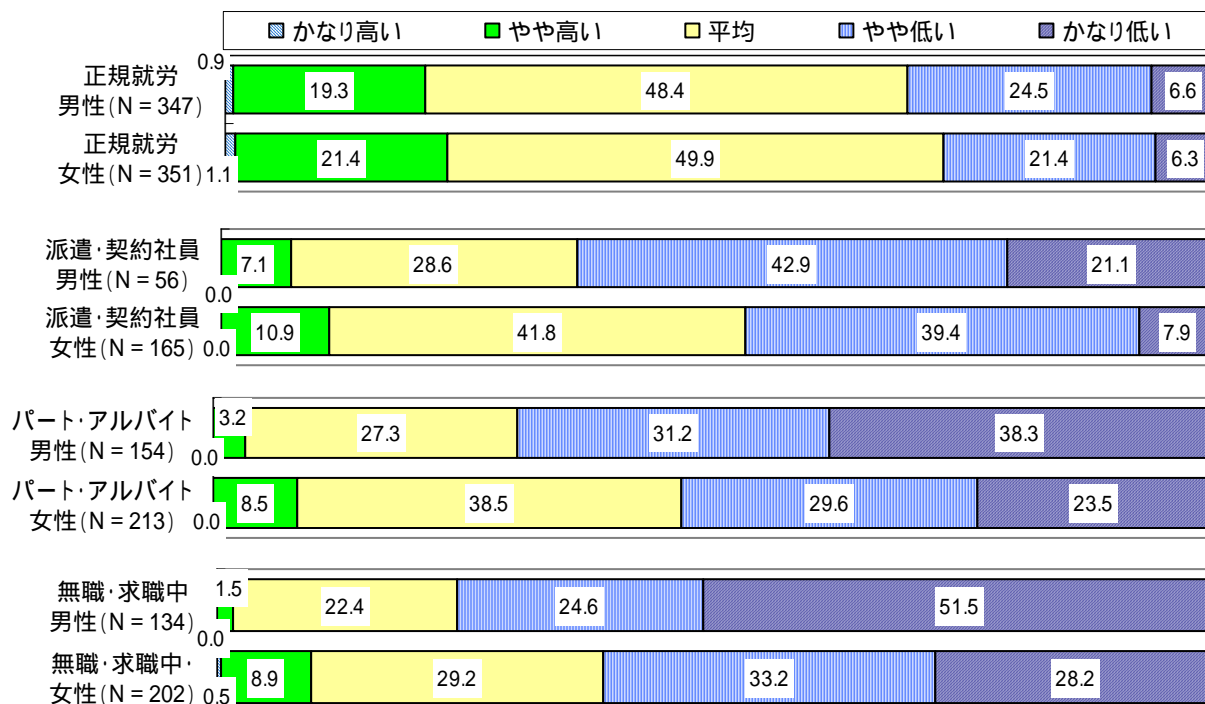
(2) どの就労形態でも、女性より男性のほうが『平均より低い』割合は高い

男女別にみると、どの就労形態でも女性より男性のほうが『平均より低い』と自己評価する割合は高い。逆に『平均より高い』は各就労形態とも男性より女性のほうが多い。

この男女差は非正規就労者において格段に大きい。『平均より低い』の割合がもっとも高いのは無職・求職中の男性で10人中8人に近い。

図表4 就労形態の違いによる現在の生活水準意識

(%)



5. 就労形態別にみた過去の就労意識・就職活動

働くことを意識する時期が早いほど、現在の就労形態は安定
 進学時点の就労意識が明確なほど、現在の就労形態は安定
 就職活動に熱心なほど、現在の就労形態は安定

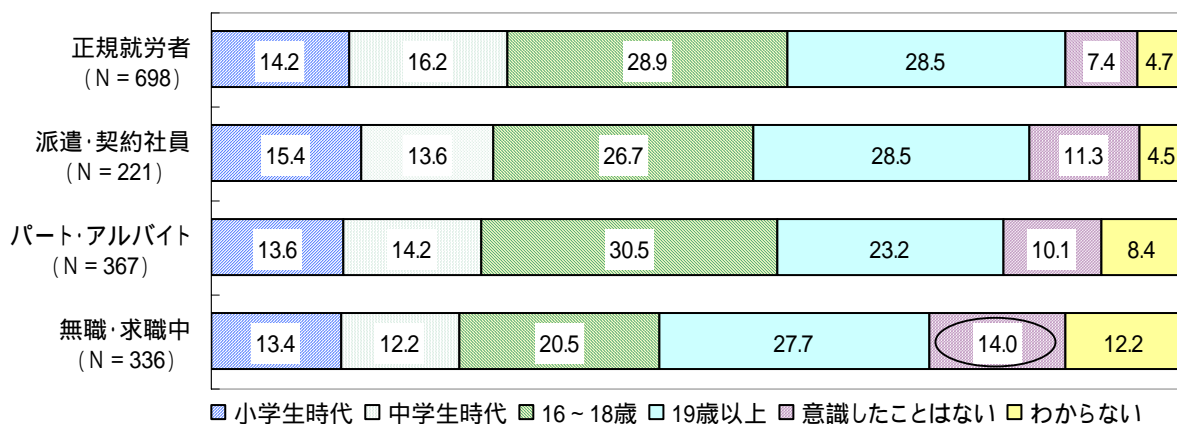
(1) 働くことを意識する時期が早いほど就労形態は安定 (図表5-1)

図表5-1は“働いて収入を得ることが必要だと意識したのはいつ頃ですか”という問いに対する回答。早い時期(「小学生時代」と「中学生時代」)から働くことを意識していた割合は、正規就労者が30.4%でもっとも高く、派遣・契約社員、パート・アルバイト、無職・求職中の順となっている。

一方「意識したことはない」という回答に目を向けると、逆に無職・求職中が14.0%でもっとも高く、正規就労者の約2倍の水準。

現在の就労形態の不安定な人ほど、働くことを意識するのが遅く、また意識したことがない人も多い傾向。

図表5-1 働いて収入を得ることが必要だと意識した時期 (%)



(2) 正規就労者で高い最終学校進学時の職業意識 (図表5-2)

“最終学校進学時に将来の職業を意識したか”を尋ねた。「大いに意識した」は正規就労者でもっとも高く26.5%。非正規就労者ではこの割合が2割前後と低い。

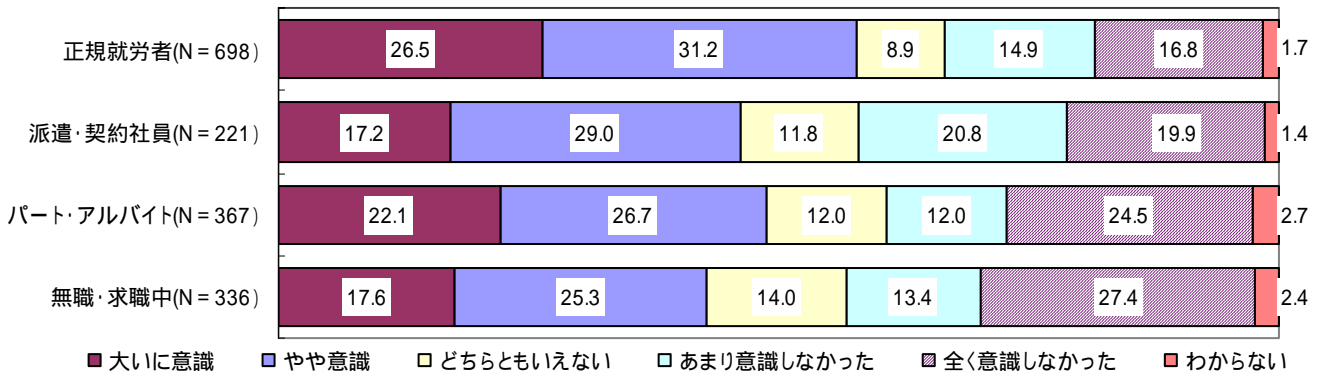
『意識した』(「大いに意識した」と「やや意識した」)をみると、正規就労者では過半数の人(57.7%)が『意識した』としているが、非正規就労者はどの形態でも半数以下。

反対に「まったく意識しなかった」に目を向けると、正規就労者(16.8%)、派遣・契約社員(19.9%)、パート・アルバイト(24.5%)、無職・求職中(27.4%)の順でその割合は増加。

進学時に職業について意識した度合いが強いほど、就労形態は安定している。

図表 5-2 最終学校進学時に将来の職業を意識したか

(%)



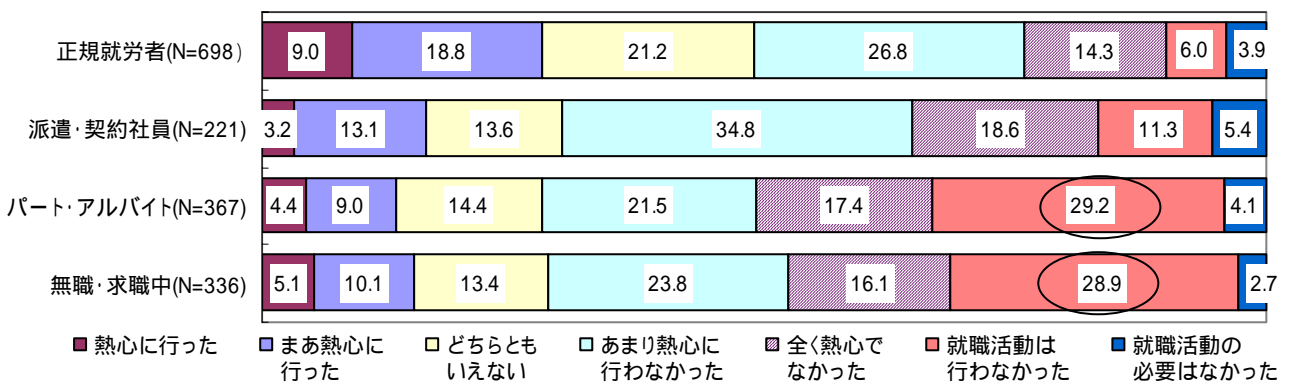
(3) 就職活動に熱心なほど、現在の就労形態は安定 (図表 5-3)

学生時代における就職活動と、現在の就労形態の関係を比較した。「就職活動は行わなかった」が、パート・アルバイト (29.2%)、無職・求職中 (28.9%) で 3 割近い。

「就職活動は行わなかった」と「全く熱心でなかった」を加えた「消極派」の割合は、正規就労者 (20.3%) と派遣・契約社員 (29.9%) は 2 割台、パート・アルバイト (46.6%) と無職・求職中 (45.0%) は 4 割台。パート・アルバイトと無職・求職中では 2 人に 1 人近くが、就職活動について極めて消極的だった。厳しい就職状況のために、就職活動をあきらめた若年層が相当数いたものと推測される。

図表 5-3 他の人と比べて就職活動を熱心に行ったか

(%)



6. 就労形態別にみた単身者の今後10年間の生活の楽しみ

非正規就労の男性で高い「就職」「転職」に対する期待感 「恋愛」「結婚」は女高・男低 3人に1人が楽しみなし 無職・求職中の男性

(1) 女性は「恋愛」「結婚」「趣味」「旅行」「生活水準向上」が楽しみ

単身者に“今後10年間くらいの楽しみ”を尋ねた。女性は順位に差はあるものの、就労形態にかかわらず「恋愛」「結婚」「趣味」「旅行」「生活水準向上」が上位5項目を占めている(図表6-1)。

(2) 非正規就労の男性は「就職」「転職」に期待感

一方、男性をみるとパート・アルバイト、無職・求職中では「就職」を楽しみとして挙げた人が2割強。また、派遣・契約社員では「転職」への期待が17.3%。

男性では安定した仕事に就きたいという期待がうかがわれる。

図表6-1 今後10年間くらいの楽しみは何か(回答は3つ以内)

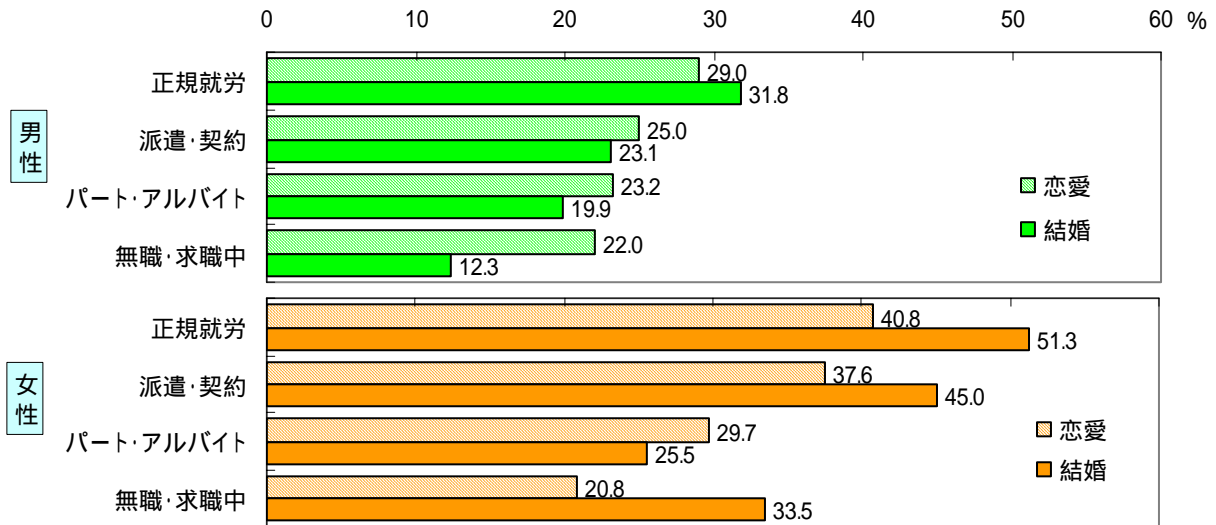
		1位	2位	3位	4位	5位
男性	正規就労者 (N=217)	結婚 (31.8)	趣味 (29.5)	恋愛 (29.0)	生活水準向上 (27.2)	旅行 (18.4)
	派遣・契約社員 (N=52)	生活水準向上 (36.5)	趣味 (32.4)	恋愛 (25.0)	結婚 (23.1)	転職 (17.3)
	パート・アルバイト (N=151)	趣味 (41.7)	生活水準向上 (27.8)	就職 (24.5)	恋愛 (23.2)	結婚 (19.9)
	無職・求職中 (N=130)	趣味 (37.7)	特になし (28.5)	就職 (22.3)	生活水準向上 (22.3)	恋愛 (20.0)
女性	正規就労・女性 (N=228)	結婚 (51.3)	恋愛 (40.8)	趣味 (36.8)	旅行 (31.6)	生活水準向上 (24.6)
	派遣・契約社員 (N=109)	旅行 (46.8)	結婚 (45.0)	恋愛 (37.6)	趣味 (37.6)	生活水準向上 (29.4)
	パート・アルバイト (N=145)	趣味 (42.1)	恋愛 (29.7)	旅行 (26.2)	結婚 (25.5)	生活水準向上 (22.8)
	無職・求職中 (N=197)	趣味 (42.6)	結婚 (33.5)	旅行 (22.3)	恋愛 (20.8)	生活水準向上 (20.3)

(3) 「恋愛」「結婚」は女高・男低(図表6-2)

「恋愛」「結婚」について、就労形態別・男女別にみた。どの就労形態でも、「恋愛」と「結婚」に対する期待は女高・男低の傾向となっている。特に無職・求職中の男性では「結婚」を挙げた人が12.3%と低く、就労の不安定さが非婚・晩婚化につながるとみられる。

また、「恋愛」「結婚」を楽しみとして挙げた割合を就業形態別にみると、男女ともに、正規就労者がもっとも高く、以下おおむね派遣・契約社員、パート・アルバイト、無職・求職中の順で減少している。ただし、無職・求職中の女性は「結婚」が33.5%でパート・アルバイトより高い点が目につく。

図表 6 - 2 今後 10 年くらいの楽しみとして「恋愛」「結婚」を選択した割合



(4) 非正規就労者の女性は男性より就労への期待が低い

非正規就労の女性について仕事に関する期待感をみると、「転職」が高いのは派遣・契約社員で 14.7%。「就職」が高いのは無職・求職中の 15.7%。いずれも男性より低く、女性の上位 5 項目の選択割合と比べて低い。

図表 6 - 3 「就職」「転職」を「楽しみ」として挙げた割合 (%)

	正規就労者		派遣・契約社員		パート・アルバイト		無職・求職中	
	男	女	男	女	男	女	男	女
就職	2.8	1.3	5.8	4.6	24.5	8.3	22.3	15.7
転職	12.0	9.2	17.3	14.7	2.0	5.5	6.2	4.1

(5) 楽しみは「特になし」が無職・求職中の男性で 3 人に 1 人

今後 10 年間の楽しみが「特になし」と回答した就労形態別・男女別の割合を示した (図表 6 - 4)。なお、設問は複数回答であるが、「特になし」は他の選択肢と重複して選べない。

かなり長い期間の展望にもかかわらず、無職・求職中の男性では「特になし」が約 3 割 (28.5%)、将来に対して希望を持っていない人の多さが目立つ。

図表 6 - 4 今後 10 年間の楽しみは「特になし」 (%)

	正規就労者		派遣・契約社員		パート・アルバイト		無職・求職中	
	男	女	男	女	男	女	男	女
特になし	7.4	3.1	11.5	0	11.3	8.3	28.5	13.2

7. 親とのコミュニケーション

父親と「良い」は、正規就労者6割、フリーター4割
 良好な父子関係を続けるには中学生までがカギ
 学生と正規就労者は「両親いずれともコミュニケーション良好」が6割。フリーターは4割強

(1) フリーターの3割が父親とのコミュニケーションが良くない

対父親 (図表7-1)

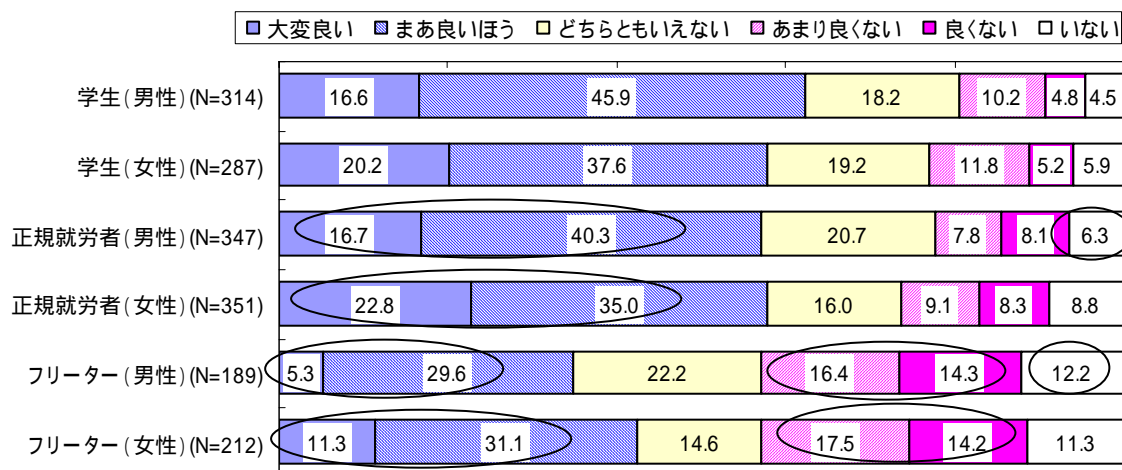
父親とのコミュニケーションの良し悪しには、就労形態による顕著な差がみられた。

学生と正規就労者は、コミュニケーションが『良い』(「大変良い」と「まあ良い」)割合が男女とも約6割。『良くない』(「あまり良くない」と「良くない」)は2割未満。

一方フリーターでは、『良い』が男性は4割に満たず、女性も4割強。「大変良い」フリーター男性は5%にすぎない。男女ともフリーターの約3割が『良くない』と回答している。

なお、フリーターは「父親はいない」とする回答が正規就労者より多く、とくに男性は約6ポイントの差。

図表7-1 父親とのコミュニケーションの良し悪し (%)



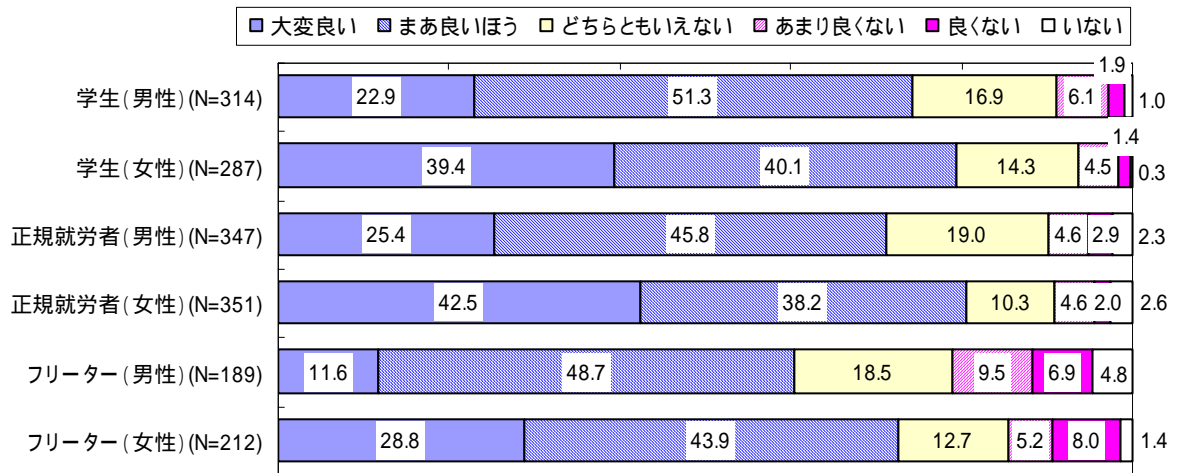
対母親 (図表7-2)

母親とのコミュニケーションは、総じて対父親より『良い』割合が高い。

学生と正規就労者では、女性の約8割、男性の7割強が『良い』と回答。うち「大変良い」割合は、女性が約4割で、男性(2割強)を大きく上回る。フリーターでも『良い』が男女とも過半。ただし、女高・男低の傾向は正規就労者より顕著。

図表 7-2 母親とのコミュニケーションの良し悪し

(%)



(2) 父親とのコミュニケーションが『良くない人』の6割は中学時代までに悪化。フリーターになって父親と悪化のケースも(図表7-3)

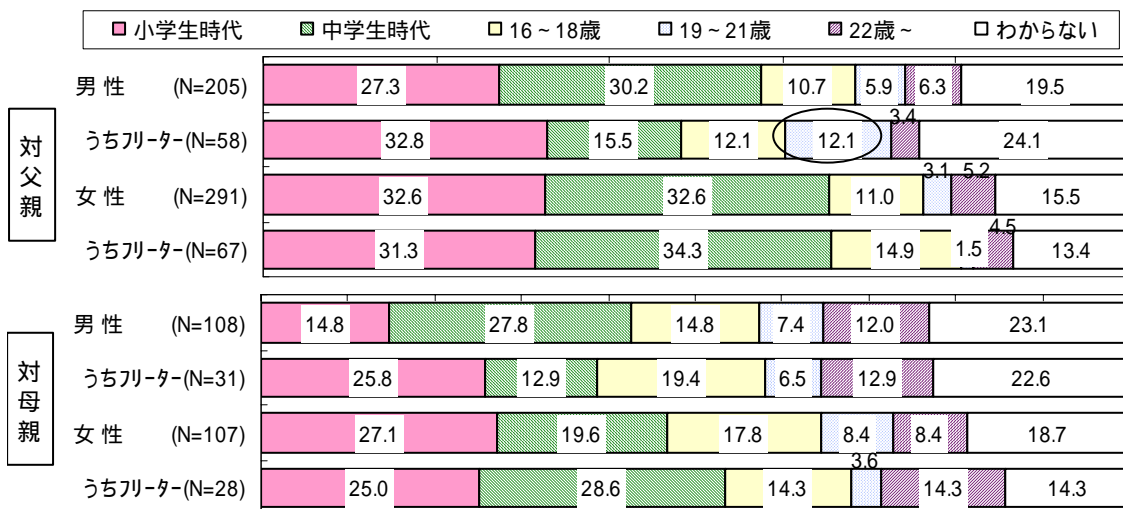
父親とのコミュニケーションが『良くない』人に、良好でなくなった時期を尋ねたところ、男女とも「小学生時代」と「中学生時代」がそれぞれほぼ3割。男性は57.5%、女性は65.2%がすでに中学生時代までに悪化してしまったことがわかる。

ただし、男性フリーターに限ってみると、「中学生時代」が少ないかわりに「19~21歳」の割合がやや高い(12.1%)。フリーターになったことが父親とのコミュニケーションの悪化理由になっているケースも、ある程度存在すると考えられる。

母親とのコミュニケーションが『良くない』人の4割強が中学生時代までに悪化している。女性の3割弱が小学生時代に悪化しており、その割合は男性の倍近い。

なお、父親との関係に比べ、母親とは高校生時代や成人前後に悪化した割合が高い。

図表 7-3 親とのコミュニケーションが悪くなった年齢(「あまり良くない」「良くない」人のみ) (%)



(3) 学生と正規就労者の6割が両親いずれともコミュニケーションが良好(図表7-4)

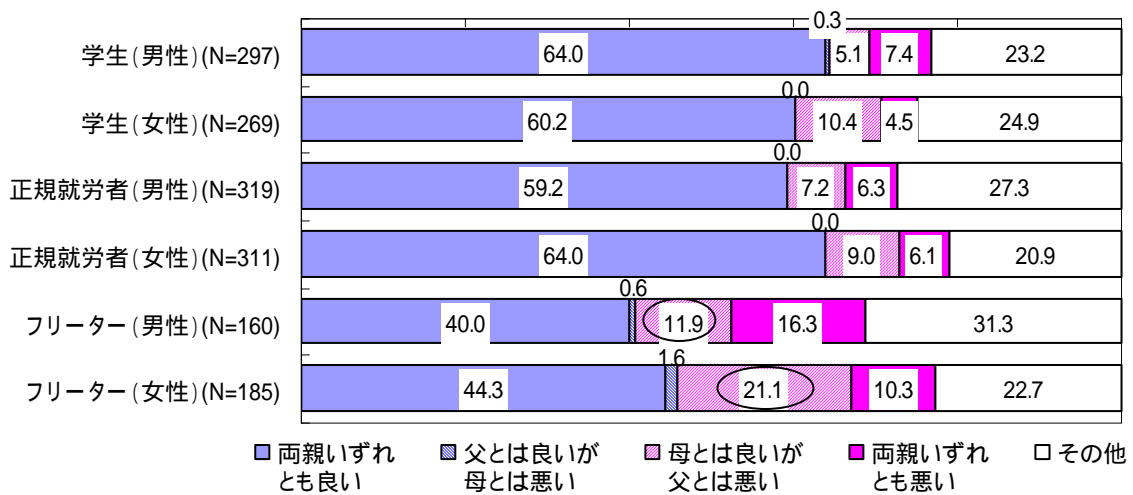
両親とも健在な学生と正規就労者の約6割が「両親いずれともコミュニケーションが良い」と回答。男女差はとくにみられない。

「両親いずれともコミュニケーションが良い」割合は、正規就労者に比べフリーターは2割ほど低い。

男女とも「父とは良いが母とは悪い」人はほとんどいない。両親の役割分担の中で、父親が悪役になっている家庭が多いのだろうか。

なお、フリーターの女性では、「母とは良いが父とは悪い」人が目立つ。

図表7-4 両親とのコミュニケーション(両親とも健在の人のみ) (%)



8. 親のうしろ姿

フリーターの半数が父親の生き方・働き方を否定 4人に1人は強く否定
 フリーターの4割が母親の生き方・働き方を否定

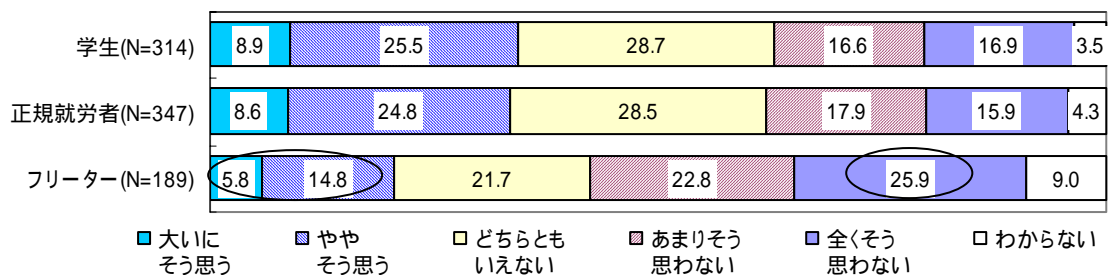
(1) 父親の生き方・働き方に対し、正規就労者は“肯定派”、“否定派”、いずれも3人に1人。フリーターは半数が“否定派”、(図表8-1)

男性に“父親のような生き方や働き方をしたいか”と尋ねたところ、学生と正規就労者では、“肯定派”（「大いにそう思う」と「ややそう思う」）と“否定派”（「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」）がともに3人に1人で拮抗。

フリーターはほぼ半数が“否定派”。4人に1人が「全くそう思わない」と強く否定している。“肯定派”は5人に1人にすぎない。

フリーターの中には、家庭での父親の姿から、父親の生き方・働き方に反発し、そのことが正規就労への障害になっているケースもあると考えられる。

図表8-1 父親のような生き方や働き方をしたいか（男性のみ） (%)



(2) 母親の生き方・働き方には、正規就労者は“肯定派”が多く、フリーターは“否定派”が4割と多い(図表8-2)

女性に“母親のような生き方や働き方をしたいか”と尋ねたところ、本人の就労形態だけではなく、母親が現在就労しているか否かによる回答の違いもみられた。

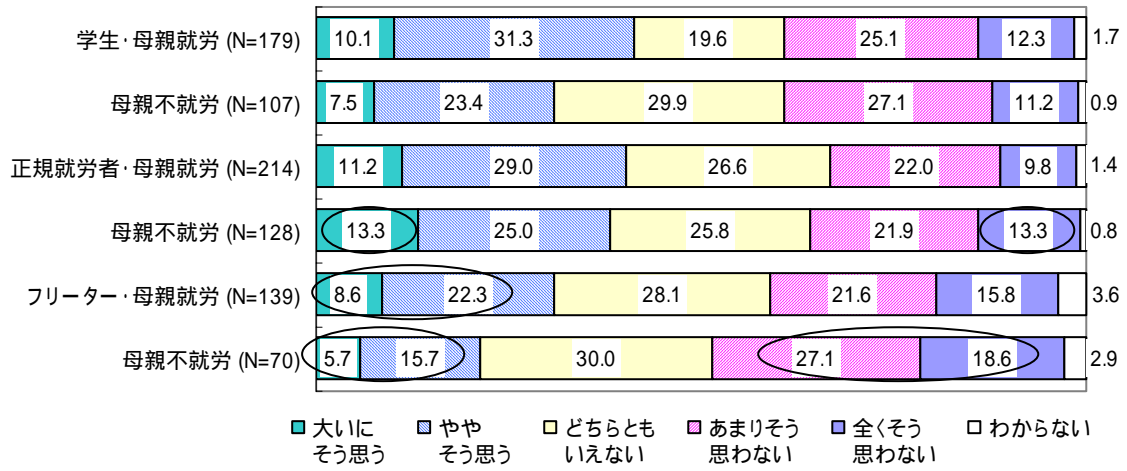
正規就労者は“肯定派”が約4割、“否定派”が3割強で、母親の就労の有無による目立った差はないものの、母親が不就業(専業主婦)の場合、「大いにそう思う」と「全くそう思わない」という強い“肯定派”、“否定派”の割合がやや高い。正規就労している自分と照らして、専業主婦に対する見方が分かれた結果となっている。

一方フリーターでは、母親が就労している場合は“肯定派”が3割強いるが、専業主婦では2割強にすぎない。逆に“否定派”の割合は、母親が専業主婦の場合は半数近くにのぼり、就労している場合より9ポイントほど高い。専業主婦という生き方のみを指しているとは限らないが、母親が専業主婦であるフリーターに“否定派”が多い点が注目される。

また、学生の場合、“否定派”は母親の就労・不就業にかかわらず4割弱だが、肯定する割合は、母親が就労している場合に比べて専業主婦は1割ほど低い。

図表 8 - 2 母親のような生き方や働き方をしたいか (女性のみ)

(%)



9. フリーターに対する若年層の評価

学生はフリーターに厳しい眼 大学生の約半数が「いつまでも続けるのはよくない」
 フリーター増加の原因を学生・正規就労者は「本人の問題」と考える傾向、フリーターは「外部環境」と考える傾向
 フリーター増加の原因を「親の経済的支援」と考えるフリーターはごく少数

(1) フリーターに対して厳しい学生の眼 (図表9-1)

フリーターについて意見を求めたところ、「いつまでも続けるのはよくない」は高校生 39.8%、大学生 44.1%で、正規就労者の 35.4%より高く、学生がフリーターに対して厳しい眼を持っていることがうかがわれる。なお、はっきりと「フリーターはよくない」は高校生 (11.8%) がもっとも高い。

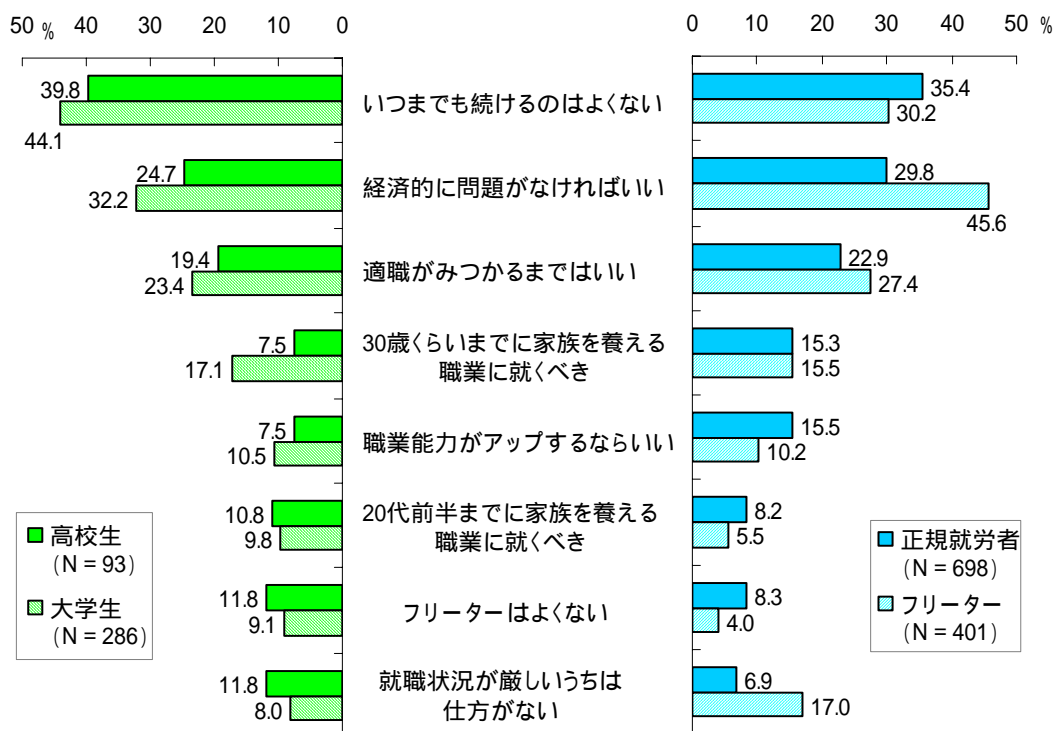
ただし、高校生でも「経済的に問題がなければいい」「適職が見つかるまではいい」といった条件付きでの肯定的な考え方が 24.7%、19.4%と上位に挙げられた。

大学生では「いつまでも続けるのはよくない」の選択割合が多く、条件付きでの肯定割合が多い。

正規就労者は学生に比べ、否定的意見が少なく、条件付きでの肯定的意見が多い。正規就労者のなかには、過去にフリーター経験を持つ人や、身近な友人・知人にフリーターがいる人もいるための結果と推察される。

フリーターはもっとも寛容な回答であり、就労形態の違いにより評価に甘辛の差が出た。

図表9-1 フリーターという働き方をどう思うか (回答は2つ以内)



(2) フリーター増加の原因を学生・正規就労者は「本人の問題」と考える傾向、フリーターは「外部環境」と考える傾向(図表9-2)

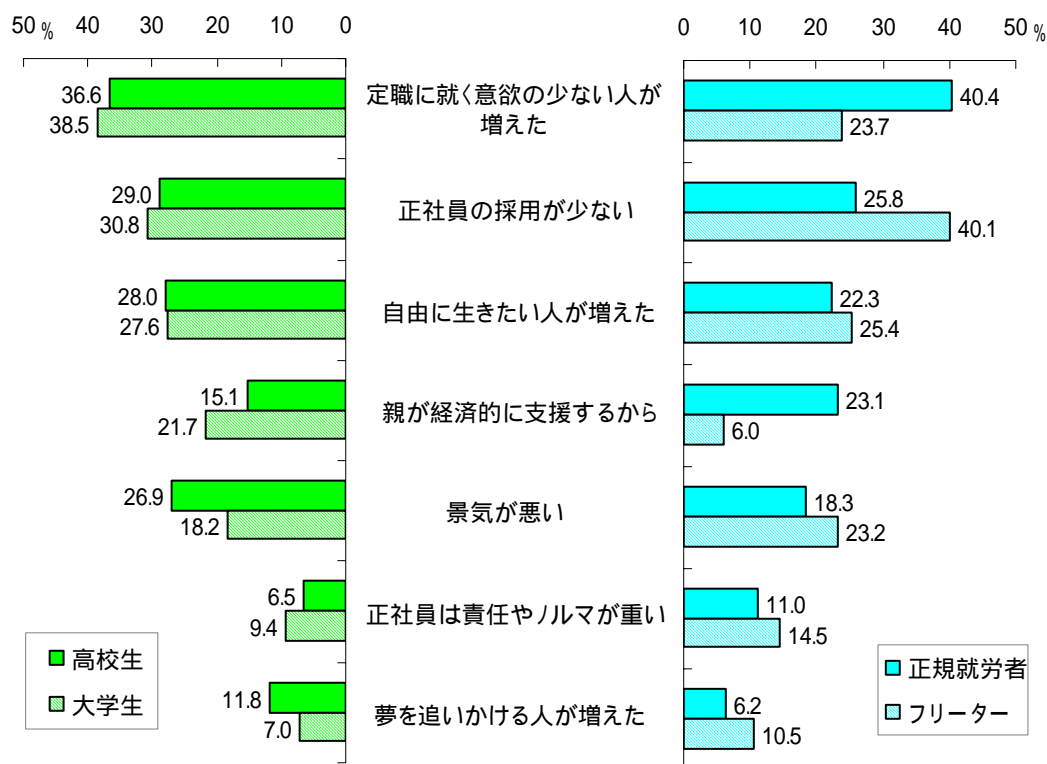
フリーターが増えている原因については「定職に就く意欲の少ない人が増えた」が高校生、大学生、正規就業者ともにトップに挙げられた。フリーターの増加を本人の問題とする考え方が4割程度ある。

ただし、原因を「正社員の採用が少ない」「景気が悪い」など外部環境の問題として捉える割合も20%~30%で少なくない。フリーター増の原因を本人の問題と捉える人と、外部環境の問題と捉える人に分かれているようだ。

一方、フリーターの回答をみると、「正社員の採用が少ない」(40.1%)がトップに挙げられ、主な原因を外部環境の問題と捉えている人が多い。

なお、「親が経済的に支援するから」は学生・正規就業者の2割強が挙げているのに対し、フリーターはわずか6.0%と低い。親の経済的支援があるために自分がフリーターになったと考えているフリーターは少ない。

図表9-2 フリーターが増えている原因をどう考えるか(回答は2つ以内)



10. フリーターになった理由

トップは「自分に合う仕事を見つけるため」。男性に多い「夢の実現」、女性に多い「自分の病気・ケガ」

年齢とともに減る「夢の実現」、増える「自分の病気・ケガ」

中退フリーターの3人に1人は、なんとなくフリーターに

(1) 「自分に合う仕事を見つけるため一時的に」がもっとも多い。男性では「夢を実現するために一時的に」、女性では「自分の病気・ケガ」が2割弱で上位に(図表10-1)

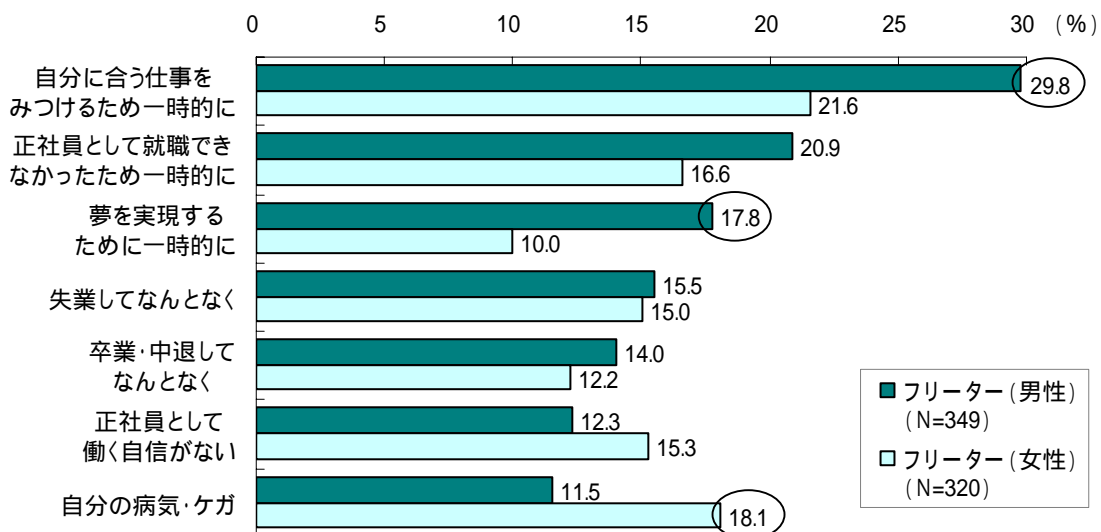
男性では、「自分に合う仕事を見つけるため一時的に」が29.8%でトップ。女性より8.2ポイント多い。男性のほうが、職業に対するこだわりが強いという結果。

次いで「正社員として就職できなかったため一時的に」(20.9%)、「夢を実現するために一時的に」(17.8%)と続く。「夢を実現するために一時的に」が、女性の2倍近いことが目立つ(詳細29ページご参照)。

一方女性では、「自分の病気・ケガ」が18.1%で2番目に多く、トップの「自分に合う仕事を見つけるため一時的に」(20.9%)と遜色のない水準。男性とは6.6ポイントの差。就職活動時に病気・ケガで正社員となれずにそのままフリーターを続けているケースや、いったん就職後、病気・ケガで退職し、フリーターとなったケースなどが考えられる。

「失業してなんとなく」「卒業・中退してなんとなく」「正社員として働く自信がない」の3項目についてはいずれも12~15%で、男女差はあまりない。

図表10-1 フリーターになった理由(回答は2つ以内)



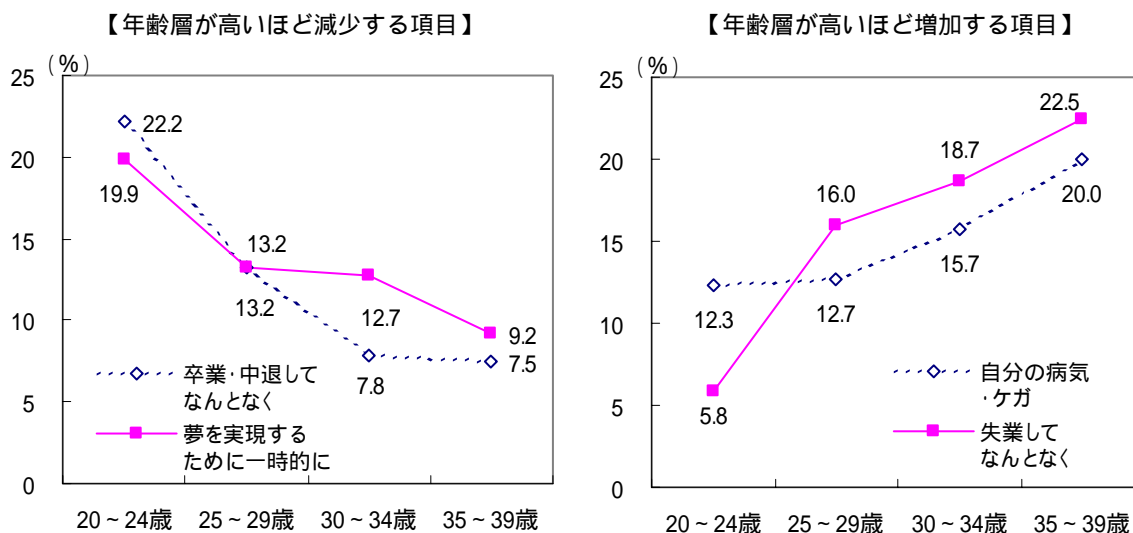
(2) 年齢が高くなるほど、「夢を実現するため一時的に」が減少し、「自分の病気・ケガ」が増加（図表 10-2）

フリーターになった理由で、年齢層別に明らかな違いがあるのは図表 10-2 の 4 項目。

「夢を実現するため一時的に」および「卒業・中退してなんとなく」を挙げた人は、若い年齢層に多く、高い年齢層ほど少ない。「夢を実現するため一時的に」の減少は、いつまでも夢を追いかけているわけにはいかないということであろう。なお、「卒業・中退してなんとなく」の減少は、時間の経過を反映した結果と理解される。

一方、高い年齢層ほど多いのは、「自分の病気・ケガ」「失業してなんとなく」の 2 項目。このような余儀なく強いられた理由で、フリーターにならざるを得なかった人の割合が、徐々に高まっている。

図表 10-2 年齢層別にみたフリーターになった理由



(3) 学校中退者では、なんとなくフリーターになった者が 3 分の 1（図表 10-3）

学校中退者では、「(卒業・)中退してなんとなく」フリーターになった人が 33.0% と 3 分の 1 を占める。卒業者 (9.0%) に比べて圧倒的に多い。

一方、「夢を実現するため一時的に」フリーターになった人は 2.6% と、卒業者 (16.4%) の 6 分の 1。学校を中退してまで夢を追いかける人は、実際にはほとんどいないようだ。

図表 10-3 学校卒業、中退による理由の違い (%)

	「夢を実現するため一時的に」の選択率	「卒業・中退してなんとなく」の選択率
中退者 (N = 128)	2.6	33.0
卒業者 (N = 576)	16.4	9.0

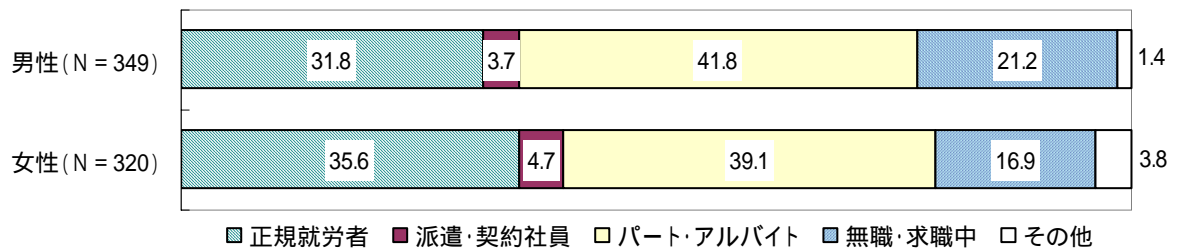
11. フリーターの卒業・中退直後の就労形態

最初からパート・アルバイトが4割で最多
 30歳代後半層は、最初は正規就労が6割弱
 中退フリーターは、9割超が最初から非正規就労

(1) 学校を卒業または中退した直後は、パート・アルバイトをしていた人が4割でもっとも多い。
 無職・求職中は2割(図表11-1)

現在フリーターの人に、“最後に行った学校を卒業(または中退)した直後、何をしていましたか”と尋ねたところ、男女ともパート・アルバイトが4割前後でもっとも多かった。無職・求職中も2割程度ある。正規就労者は3分の1程度。男女差はほとんどみられなかった。

図表11-1 学校を卒業・中退した直後の状態 (%)

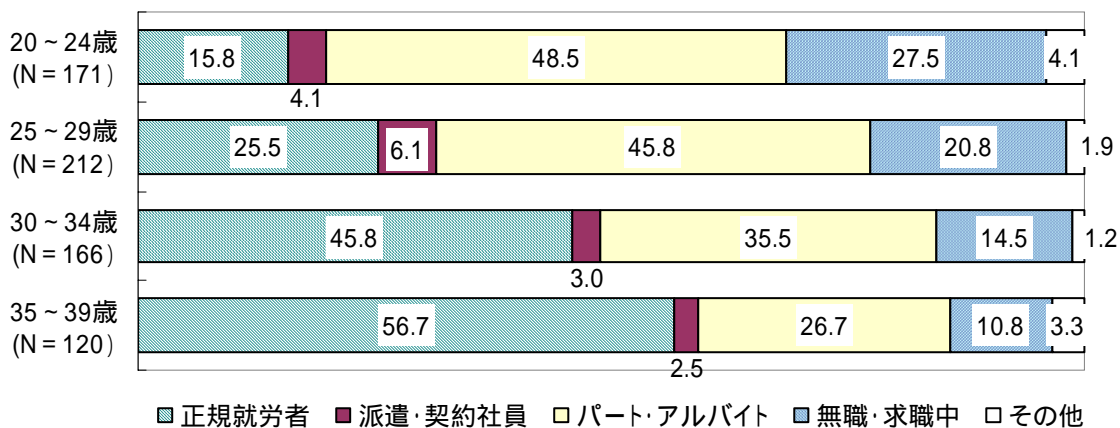


(2) 20歳代前半層では最初からパート・アルバイトが5割弱。一方、30歳代後半層は正規就労者だった人が6割弱(図表11-2)

上記の回答を、年齢別にみたのが図表11-2。最近、就労年齢に達した20歳代前半層では、最初からパート・アルバイトだった人が48.5%を占め、無職・求職中も27.5%存在する。正規就労者は15.8%にすぎない。

一方、バブル期に就職の時期を迎えていた30歳代後半層では、正規就労者だった人が56.7%を占め、パート・アルバイト(26.7%)、無職・求職中(10.8%)を大きく上回っている。この年齢層では、卒業・中退直後は正規就労者だったが、その後離職してフリーターとなった人が半数を超える。年齢が高いほど、正規就労者からフリーターになった人の割合が高い。

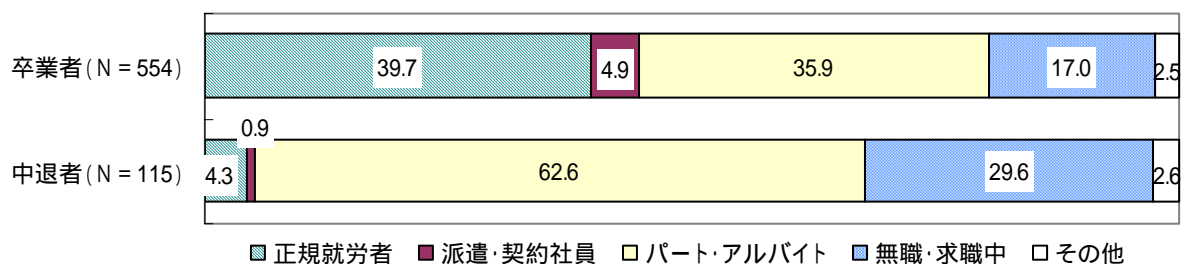
図表 11-2 学校を卒業・中退した直後の状態（年齢層別）（％）



(3) 中退者は、学校を離れたあと、6割がパート・アルバイト、3割が無職・求職中（図表 11-3）

同じ質問について、フリーターを学校卒業者と中退者に分けて集計してみた。中退者は、パート・アルバイトが62.6%、無職が29.6%。正規就労者はわずか4.3%にすぎず、卒業者と比べて大きな差がある。中退者の厳しい就労環境がうかがわれる。

図表 11-3 学校を卒業・中退した直後の状態（卒業・中退別）（％）



12. “夢追いフリーター”の姿

“夢追いフリーター”は男性に多い

夢の職業は「芸能・芸術関係」が3分の1を超えトップ

“夢追いフリーター”は親元を離れている人が多い

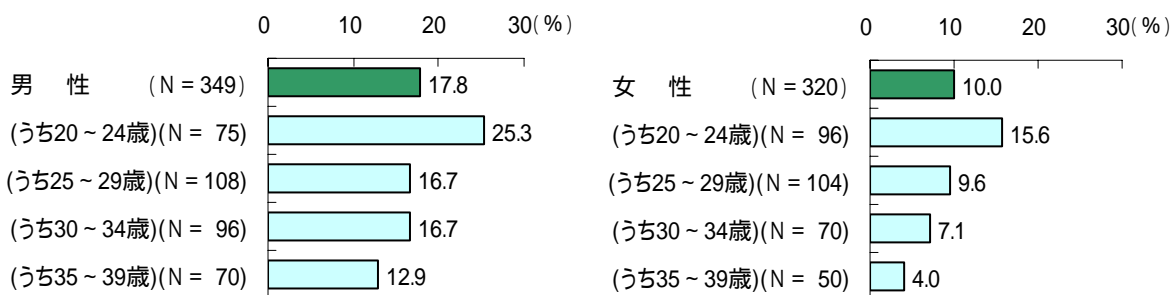
(1) “夢追いフリーター”は男性に多い(図表12-1)

フリーターになった理由で、「夢を実現するため一時的に」と回答した割合は、男性では17.8%で3番目に高く、女性(10.0%)の倍近い。

(注)本報告書では、このような若者を“夢追いフリーター”と呼称

年齢別にみると、年が若いほど“夢追いフリーター”の割合が高い。男性フリーターの20歳代前半層では4人に1人(25.3%)がこのタイプ。30歳代後半層では、夢を諦めて他の仕事に就く人が出てくる一方で、前述のとおり失業や病気などのやむを得ない理由でフリーターになった人が増えるため、“夢追いフリーター”の割合は12.9%に減少。

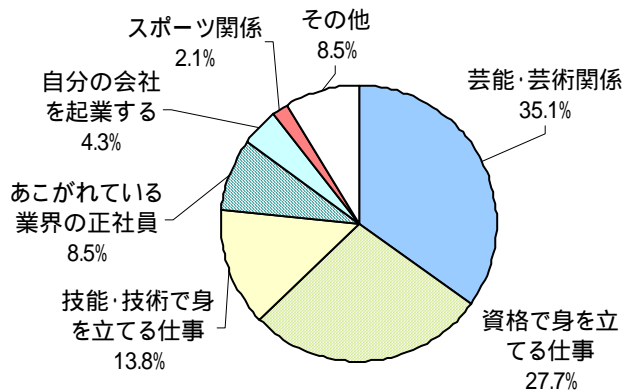
図表12-1 “夢追いフリーター”の割合



(2) 夢の職業(図表12-2)

“夢追いフリーター”にその夢の職業を尋ねたのが図表12-2。「芸能・芸術関係」が35.1%でトップ。次は「資格で身を立てる仕事」で27.7%。この2つで6割を超える。「技能・技術で身を立てる仕事」が13.8%で続く。

図表12-2 夢の職業の内容

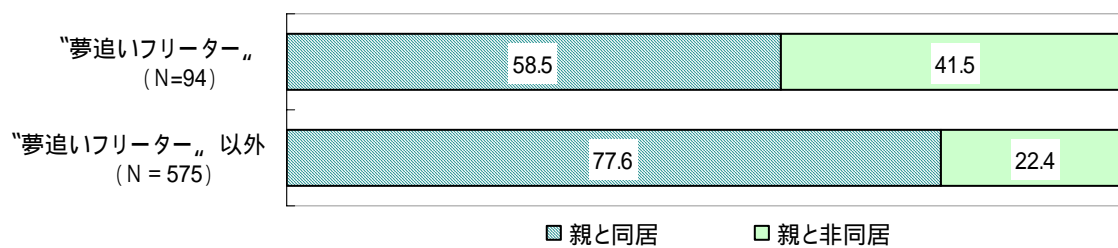


(3) “夢追いフリーター” は親元を離れている人が多い(図表 12-3)

親との住まい方をみると、“夢追いフリーター”の親同居率は58.5%で、それ以外のフリーターの77.6%が親と同居しているのと比較して、20ポイント近く低い。このことから“夢追いフリーター”には、親元を離れ都会で暮らす人が比較的多いと推測される。

図表 12-3 親との同居・非同居

(%)



13. フリーターの結婚観・子ども観

25～34歳の男性フリーター、4人に1人は「結婚するつもりはない」
 男性フリーターの5人に1人は「子どもはほしくない」

(1) 20歳代後半～30歳代前半の男性フリーターの4人に1人は「結婚するつもりはない」(図表13-1)

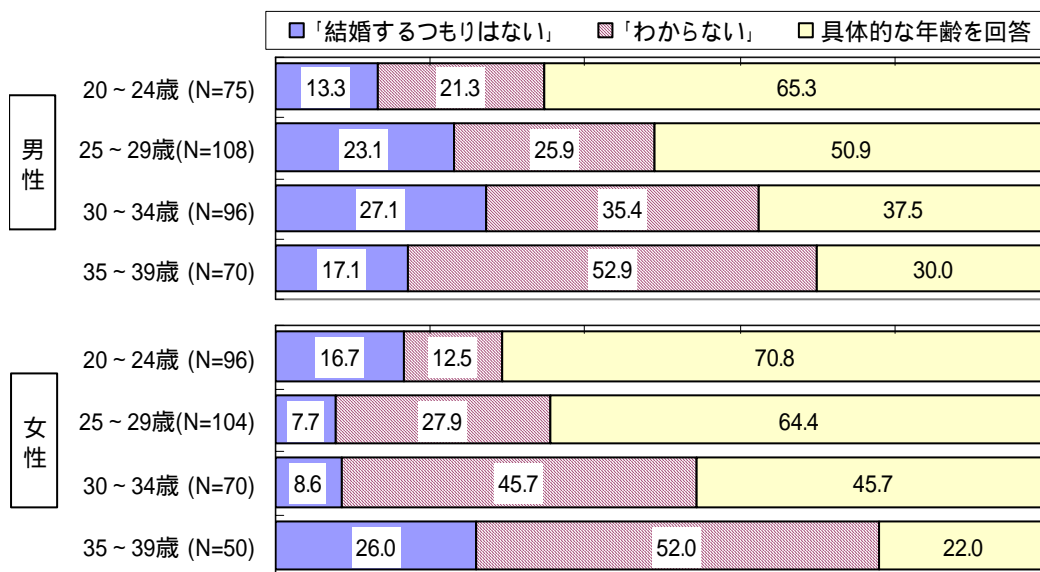
“何歳くらいで結婚したいか”という質問に対し、20歳代後半と30歳代前半の男性フリーターのうちほぼ4人に1人が「結婚するつもりはない」と回答。

また、「(結婚したい年齢は)わからない」とする男性フリーターは、20歳代後半では4人に1人、30歳代前半では3人に1人、さらに同後半では2人に1人に達した。

フリーターのうち具体的な結婚希望時期のない割合は、男女とも年齢層が上がるにつれて高まり、男性では20歳代後半49.0%、30歳代前半62.5%、同後半70.0%、女性では20歳代後半35.6%、30歳代前半54.3%、同後半78.0%。

30歳代のフリーターには「わからない」という回答が多い。その中には、「結婚するつもりはない」わけではないが、経済的な見通しが立たないために、具体的に結婚したい年齢までは考えられず、「わからない」と回答した人も多いと想像される。

図表13-1 「結婚するつもりはない」「(結婚したい年齢は)わからない」と回答したフリーター(%)



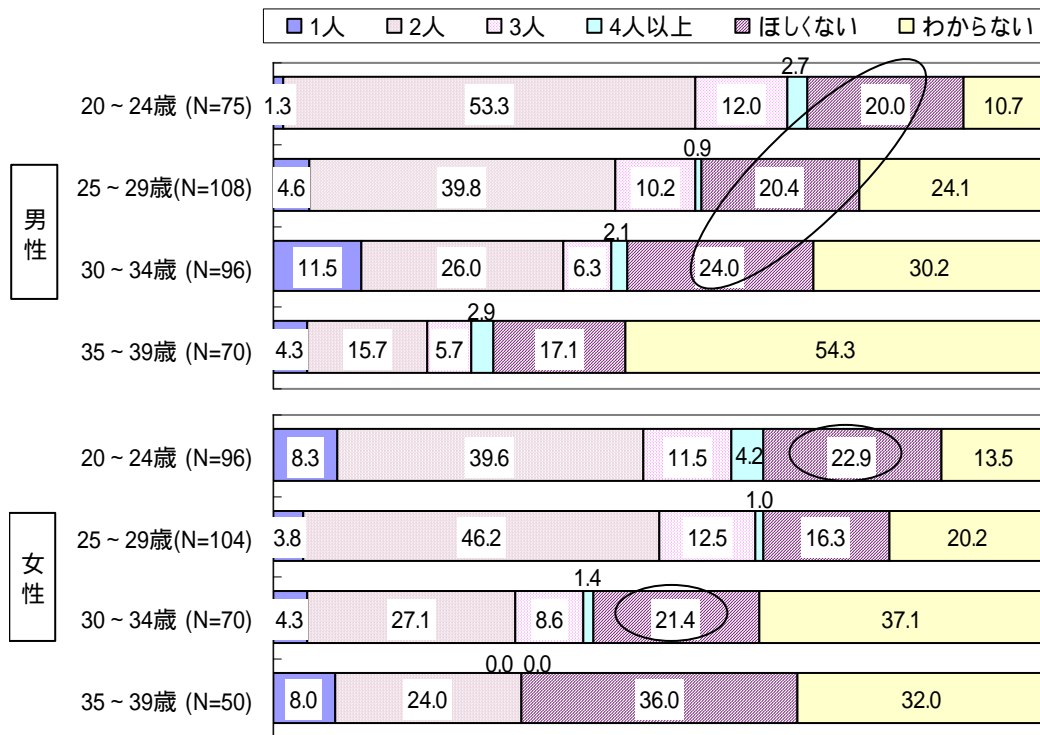
(2) フリーター男性の5人に1人が「子どもはほしくない」(図表13-2)

フリーターに“子どもは何人ほしいですか”と尋ねたところ、20歳代から30歳代前半の男性、および20歳代前半・30歳代前半の女性の2割以上が「子どもはほしくない」と回答している。ちなみに、正規就労者で「子どもはほしくない」と回答した割合は、男性では20歳代前半9.9%、同後半7.7%、女性では20歳代前半7.4%、同後半11.7%。

フリーターは、経済的な不安から結婚を具体的に考えにくく、ましてや子どもは想定できないという状況が想像できる。少子化対策には若年層の雇用対策も不可欠であることが、この結果からも読み取れる。

図表 13-2 フリーターのほしい子どもの人数

(%)



14. フリーターから正規就労者になった人

きっかけは、「希望していた職業に就けた」「正社員としてやりたい仕事が見つかった」の2項目が多い
 半数以上はフリーター生活1年以内

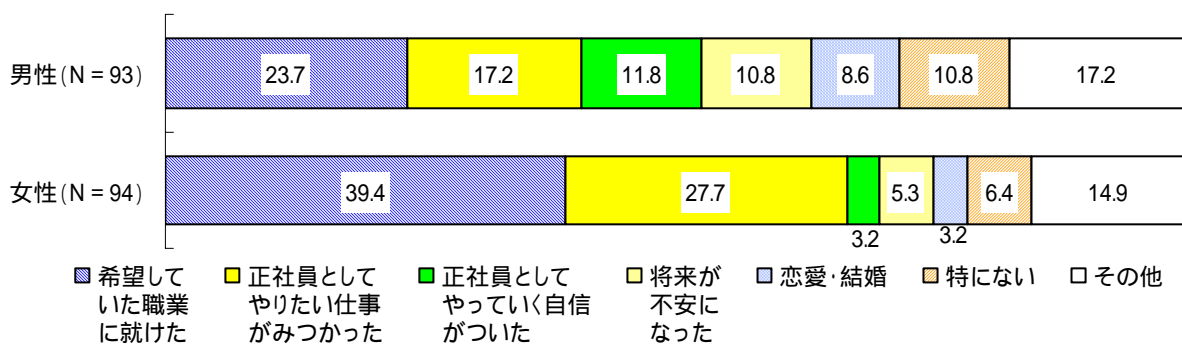
(1) フリーターをやめたきっかけは、「希望していた職業に就けた」「正社員としてやりたい仕事が見つかった」の2項目が多く、女性は7割弱、男性は4割(図表14-1)

現在は正規就労者だが、過去にフリーターの経験がある人に、フリーターをやめたきっかけを尋ねた。

女性は、「希望していた職業に就けた」(39.4%)、「正社員としてやりたい仕事が見つかった」(27.7%)の2項目で7割弱を占め、他の回答は少ない。

男性はこの2項目で4割。「正社員としてやっていく自信がついた」「恋愛・結婚」「将来が不安になった」という回答が、女性より多いのが特徴。

図表14-1 フリーターをやめたきっかけ (%)



(2) フリーターだった期間は1年以下が5割超。2年を超えると正規就労には就きにくい(図表14-2)

男女とも、フリーターをやっていた期間は「1年以下」と答えた人が5割を超える(男性51.7%、女性56.3%)。「2年超」と回答した人は2割程度と少数派。

図表14-2 フリーターだった期間 (%)

